
未来電話

クロフォード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来電話

【Nコード】

N0639H

【作者名】

クロフォード

【あらすじ】

未来電話——……。それは、未来の自分につながるという都市伝説。それは、すなわち自分の未来を知ることができてしまうという、不思議な伝説。その電話がつながった時、あなたはこの都市伝説の理解者になれる……。

都市伝説（前書き）

今回は、ありそう（？）な都市伝説を書いて見ました。

十分楽しめるような作品にしたいと思っています。

こんな、楽しいコメディ都市伝説……あると思います!!

—— あなたは知っていますか？

自分の家で 自分の家のダイヤルを
回すと

未来の自分につながることを——。

都市伝説

あの時、俺はそんなことがありえるわけがない。そう思いダイヤルを回した。

すると、手に持つ受話器の向こうから聞こえてきたのは、俺を名乗る男の声だった――……。

俺は、唾を飲み込み、ありきたりな言葉を言い放った。

「……………もしもし?」

つまり、クールに生きている。

頭髮は、黒くナチュラルにしている。

男子女子問わず、良く遊びに誘われたりするが、気が向かなければ
いけない。

そんな性格さ。

今朝、俺はいつも通り7時に起きた。

いつも通りトーストを食べ、いつも通り母親に見送られ、電車とバスで登校した。

繁華街から、人通りの少ない町、トンネル……と、次々と変わる景色を車窓越しに見ながら、今日もまた変わることのない、つまらない一日が始まったことを確認する。

それから、バスに乗り換え、6つ目の停留所で降りた。

しばらく歩いて、すぐの所に俺が通う高校がある。

俺は、何も変わらず校門をくぐった。

……これから俺に降りかかる、ありえない半生が始まることも知らず――。

都市伝説の噂

何も変わらない、いつもの高校生活……。

俺は、今朝も変わらず学校へ登校した。

しかし教室に入ると、なにやら人だかりができていた。

……まあ、そんなことは日常茶飯事で特に珍しい事ではなかった……。

だが、俺が席に座った時、聞こえた話が妙に頭に残る。

「——……ねえ、みんなこの話知ってる？」

人だかりのできている中心に座っていた女子が、みんなに興味を示させようと言う。

「え？なにになに？」

案の定、他のお話好きの女子たちは食いつく。

「未来電話……って、都市伝説があるんだけどお……」

中心に座っている女子は、じらすように言う。

「えー？何それ？初耳なんですけど」

周りの女子たちは、ケラケラと笑っている。

「えつとねえ……聞いた話によると、自分ちで自分の家のダイヤル回すと、未来の自分につながるっていう話」

「何それー！？うさんくさっ！」

周りの女子は、その話を軽くあしらうように笑って言う。

「えー、でもおもしろそうじゃん！」

すると、周りにいた女子の一人が割り行って言う。

「あつ、そういえばさあ、駅の近くに新しいケーキ屋できたんだけどさあ——……」

その後は、違う話題に切り替わり、その話は以後聞くことができなかった。

未来電話……？くだらねえ……。

そんなことを思っていたが、さっきの話が俺の頭に妙に残っているという事は、俺は未来電話が気になっているということだ。それは否定できない。

俺は、一旦その話を忘れることにした。

俺は窓側最後尾の席に座っている。

実を言つと、俺はこの席が気に入ってる。

目立たず、日の光や風はもちろん、様々なものを感じ、見ることが出来る。

一番落ち着く場所だ。

ふと外を見ると、グラウンドで野球部とサッカー部、あとグラウンドの端でラグビー部が汗をかきながら練習をしている。

俺はスポーツは嫌いじゃない。

バスケット、サッカーだって、野球だって、ラグビーだって、卓球だって、なんであるうと人並み以上には出来る。

ただ、朝が苦手なんだ。低血圧なんだ。起きるのがダリーんだ。だからと言って、スポーツ馬鹿とは勘違いされたくない。

ここ、晴嵐は偏差値が高い。全国で見ても、中の上ぐらいだ。

まあ、特別頭が良いというわけでもない。

そんなことを思いながら、ふと空に目をやると、真っ青な空がまるで海のように、一面に広がっていた。

その海を自由に飛ぶ鳥たちは、まるで魚のようだった。

冬の青空ほど気持ちの良いものはない。

俺は、至福のひと時を堪能していた。

が、その時。一人の男が俺に光の如くダイブをしかける。

「よぉー城崎い！なーにクール気取ってんだよ！」

朝っぱらから俺に飛びついてくるこの馬鹿は、たにむら谷村きょう京。

カチュウシャで男子にしては長い髪を留め、常時テンションが高く、性格的には……天然の馬鹿キャラ？しかし、その性格となかなかの顔から、男女関係無くモテる。

そして身体の95%が国産天然馬鹿素材で出来ている、本物の馬鹿だ。

いや、頭が悪いとかの馬鹿じゃない。そもそも、頭が悪いなら晴嵐に來れないわけだし。

行動の意図がわからない。気を抜いて話すと、谷村ワールドに連れ込まれてしまう可能性がある。などなど。

要注意人物だ。

「谷村……お前は、なぜいつもそんなにテンションが高いんだ？」

俺が、そう問うと谷村は突然その場で回転し始める。

「あー。何か今日は特別テンションたけーわ」

「いつもだろ」

「そういや、なに考えてたんだイ？」

谷村の回転が急停止し、俺の目をみていきなり質問を繰り出す。

これが谷村ワールド（危険度1）だ。

「今後の地球の行く末について。かな」

「うおう……スケールでかいな。さすがだな」

素で驚く谷村^{「イッ」}には、たまに冗談が通じないのかと思う。

「どうだ。お前も空をしてみる。心も身体も楽になるぞ」

俺は谷村を窓の近くに誘う。

「そうか？」

俺の誘導で、谷村は窓から身を乗り出して空を見る。

「……本当だ。心も身体も楽になってゆくようだ……」

そう、俺は普通の高校生だった。

ついさっきまでは。

今、俺が手に持つ受話器の向こうで俺と会話をしているのは、まぎれもない……。

しばらくして、谷村が俺のところにフラフラと歩み寄って来た。

「城崎お前……普通3階から人を落とすか？普通できないよ。平常心で人を突き落とすなんて考えもつかないよ」

「安心しろ。人は苦難を乗り越える事で長生きできるものさ」

「いや、今のは苦難通り越して三途の川まで乗り越えるところだった」

と、俺と谷村が睨み合っていると、チャイムが鳴る。

そして、ほぼ同時に教室の前ドアから俺たちの担任が入ってくる。

「こらこら。静かにしないか、皆の衆。もうチャイムは鳴っていますよ」

「げっ……イチローきた」

このように、俺も谷村もいつ聞いてもウザイと思う、へんな口調を使っているらしい。このお方は、俺たちの担任である國枝くにえだ 一郎先生。40歳の妻子持ちで、最近目が悪くなったのでコンタクトにするが、コンタクトをつけるときの顔が気持ち悪いと愛娘に言われ、メガネに。子どもは長男、長女、次女、の三人。妻は2人。

「はい、じゃあ今日も一日がんばりまふすっ……がんばりましょう」

あ、噛んだ。

そして、今日も何も変わり映えしないつまらない学園生活が終わった。

学校の帰りは、行きほど急ぎはしないので、いつも歩いて駅まで行く。

大体歩いて20〜30分だ。

しかし、妙なことに、今日は一つ違うところが……。

今俺の隣には、なぜか一緒に帰宅しているヤツが居る。

「……なんでお前が居るんだ？部活はどうした」

俺の隣には、何も無いのにニコニコしている谷村がいる。

「今日は休みだよ」

なんだ……ええっと、確かコイツは中学のころバスケの名門高校に特待生として呼ばれていたらしいんだが、その喜ばしい話を蹴つてまで晴嵐に来たらしい。

理由は……『家から一番近いからさアアア！』とか、目をきらき

らせながら言っていた。

本当に、コイツのやっていること、やりたいことが俺には理解できない。

そして、俺がどうしてこんなヤツと吊るんでいるのかも俺自体理解できない。

すると、急に谷村は俺の歩くスピードにあわせスキップをし始める。

足が地に付くのと同時に、ガツチャガツチャと背中に背負った学生靴と、何が入っているのか検討もつかないその中身が音を立てる。

とても耳障りだ。

さらに、そのまま俺に質問をしてくる。

「なあ、今朝うちのクラスの女子達が話してた都市伝説……やってみねえ?」

「都市伝説?」

俺の頭の中に、しばらく忘れていた今朝の女子達の会話のシーンがよみがえる。

「ああ」

「なあ? やってみようぜ!」

「……くだらねえ。勝手にやってろ」

「えー！？やんねーの！？」

「お前はそんなに都市伝説に興味があるのか？」

「じゃあこうしよう！最初に未来の自分と繋がったほうが勝ち！で、負けたヤツに何をやらせてもいいという」

「いや、だからそんな都市伝説、俺は——って、お前の家もう通り過ぎてんじゃねえの？ 一体どこまでついてくる気だ？」

「お前の部屋？」

「一生のお願いだ。消えてくれないか？」

そんなやりとりをしていると、急に谷村が立ち止まる。

「どうした？」

「あれ」

と、谷村は指を差す。

その指差した先にあつたものは、鳩だった。

「なに？あの白い鳥？」

谷村は、本当に不思議そうに言う。

「え？いや、鳩だけど」

「うつそ！？白い鳩なんて居るの！？」

「いや、普通にいるけど……え？知らなかった？」

「へえ、珍しい！」

「いや、白い鳩ってそんな珍しくないぞ！？」

すると、白い鳩が鳴き出した。

『カー！カー！』

「カラス！？」

「めっ珍しいっ！」

とつさに、谷村はしゃがんで白いカラスに向かって手招きをする。

「おいでおいで。クレープあげる」

「いつの間にクレープを！？」

「ほら、おいで」

「ちょっと、やめなさいって」

「え？でも……カラスもクレープ食べるかなあ……って」

「いや、危ないよって」

「大丈夫だつて」

そついつて、谷村はクレープを右手で小さくちぎつて鳩に差し出した。

「ほら、食べな」

白いカラスは谷村の左手にある、ちぎられた本体（大きいほう）を奪い取つて喰らつた。

「そつち!？」

さらに、大量の黒いカラスが谷村めがけて飛んできた。

狙いは小さくちぎられたクレープ!!

「うわああああああ!!」

そのまま、カラスに追われながら谷村は走り去つてしまった。

その途中。

「城崎イイイイ!! お前、絶対やれよ!! 未来電話アアアアアアアアハアアアイ!!」

俺は、谷村に向かって手を合わせた。

さらば……谷村。……つか、クレープ捨てればいいんじゃないか？

「……………未来電話……………か……………やっぱり、くだらねえ……………」

ふと空を見ると、茜色の空が広がっていた。

谷村^{バカ}と話していたせいで、夕方となってしまうていたのだ。

俺は、駅までの道のりを早足で歩いた。

そして、帰りの電車に乗り、自宅玄関前まで帰ってきた。

俺は、自宅の玄関の鍵穴に鍵を差し込み鍵を開けた。

ガツチャン！と、聞き慣れた開錠の音が鳴る。

その音を聞いた後、鍵を一旦ポケットにしまい、ドアノブに手をかけドアを開いた。

家の中に入り、第一声を放つ。

「
た
だ
い
ま
」

繋がる未来

「ただいま」

と言つても、今は誰もいない。

母はパートで出かけている。

親父は、おそらく今日も夜は遅いのだろう。

まあ、大手企業の専務（取締役）だから仕方が無いのだが。

家族は俺と兄貴と姉貴、両親の四人家族。

兄貴は今頃大学のサークルで遊びほうけ、この後も合コンでもして帰るのは朝になるのだろう。

兄貴がそんな遊び人になったのも……理由がある。

姉貴は今は美容師の道を選び、夢に向かって一人暮らしだ。

たまに家に帰ってきては、ダラダラと過ごして帰っていく。

父は家族を養えるような立派な仕事に就いている。

なのに、何故母がパートをしているのかというと、「市内全体の婦人とお話しが出来るから」だそうだ。

リビングに入ると、シュンシュンと音が聞こえてきた。

音の聞こえたほうを見ると、加湿器が作動していた。

おそらく、母親がパートに行く時に消し忘れていったのだろう。

さらに、その加湿器の近くに置かれていた盆の上の山積みของポテトチップスは、ほとんどしなびれてしまっていた。

やれやれ、と思いながら俺はリビングに入り、鞆をソファの上に放り投げて、加湿器の電源スイッチを切り、キッチンに向かった。

冷蔵庫を開けて見ると、いろいろな食材、あと中身が少し残っている牛乳パックがあった。

俺はその牛乳パックをパックごと一気飲みし、またリビングに戻り、鞆をソファの横の机に移して、ソファに座った。

そして、リモコンを手に取り、テレビの電源をつけた。

夕方6時のニュースが始まる。

やっぱり近頃……いや、昔からか。暗いニュースしかやらないものだ。

世界も変わることができねえのか。それとも、変えようとしねえのか……。

殺人……テロ……世界経済……補正予算案の審議続く……ひきこもり……自殺……破局……密かにファンだったタレントの一之瀬あやのが結婚……。

「……………」

俺は、気持ちを入れ替えるため、チャンネルを、3チャンネルに変えた。

ちょうど、『忍たま 乱三郎』のOPのサビの部分だった。

何故かこのOPは元気が出てくる。

しばらくして、ブーン、ブーンと耳障りな振動音を鳴らし、俺の携帯が鳴る。

「つたく、誰だ？」

俺はいいや鞆に手を伸ばし、チャックを開け、中から携帯を取り出した。

そして、メールの内容を見る。

『数量限定！！ ヴイトン¥50,000………』

「迷惑メールかよ………」

俺は携帯をたたみ、ソファに寝転がり、ふと天井を見る。

『——— ねえ、未来電話って知ってる？』

「未来電話……… ねえ………」

携帯をしまつてから、最初に俺の目に映ったのは、テレビの横にある、電話の子機だった。

俺はそれを見た後、フーっと鼻から息を吐き、しばらく黙った。

そして、俺は思った。

「このまま変な都市伝説の話しを、俺の頭にいつまでも引っ掛からせておくのも気持ち悪いな……」

俺は、すぐに行動に移した。

バツと立ち上がり、子機に手を伸ばした。

時計は、午後6時5分を指していた。

俺は、緊張してたのだろう。テレビを切った。

カチッ……カチッ……。と、秒針の音が静まった部屋に響く。

「……………本当にやるのか？」

そう自分で自分に問う。

俺は一度深く息を吸って、フーっと息を吐く。

そして、息を一度止めた。

ドクン……ドクン……。と、今度は心臓音が聞こえる。

「何を緊張してんだ俺。こんなくだらねえ事で」

俺は、ゆっくり自分の家の番号を押していった。

そして、番号を押し終えた瞬間。

受話器の向こうから聞こえてきたのは……。

『シー……シー……シー……』

会話中の音である。

自分の家から電話をかけても、こうなることはわかっていた。

「……………ふつ。なにやってんだ俺」

俺は、文句を言ってやろうかと思い、そのまま子機で谷村の携帯に電話を入れた。

『プルルル……プルルルル……プルルルル……』

……………でない？

そして、留守電のガイダンスが流れたのと同時に、俺は電話を切った。

「気づいてないのか？」

そう思い、その十分後またかけなおすが、繋がらない。

その後も数回鳴らしたが、出る様子は無い。

「もしかしてあいつ、まだカラスに追われてんのか……………？」

俺は、子機を元の位置に戻す。

しかし、まだ頭に引っ掛かっている。

「どうせかからねえことはわかってんだ。やるだけ無駄だよな……………」

だが、俺はしばらく受話器を見つめていた。

「……………あー！これで最後だぞ！」

俺は段々と苛立ちに変わった都市伝説への気持ちを抑えて、自分の家の番号を押す。

『ツー……ツー……』

……やっぱりな。

「何度やつても同じだったか」

そう思い、電話を切ろうと思ったその時だった。

『ツー……プツツ……プルルル……プルルル……』

「!？」

かかった!??

いや、冷静に言うと、まだかかっていない。呼び出し音が鳴っているだけだ……。

番号を間違えたか!??そう思ったが、リダイヤルボタンを押したのを思い出す。

じゃあ、まさか……。

そう思った時、電話の呼び出し音が途切れる。

「!?!」

しかし、しばらく沈黙が続く。

受話器の向こうからは、静かな息遣いと、時計の秒針の音だけが聞こえる。

恐らく、受話器の向こうの人も同じように感じているだろう。

しかし、俺に関しては、緊張と驚きで息遣いは多少荒く、鼓動は早くなっていた。

言葉が出なかった。

向こうも同じか、誰かはわからないが……いや、もしかしたら……。

その思いを自重し、俺は受話器の向こうの奴は赤の他人だと思い込み、恐る恐る受話器の向こうの人に向かってありきたりな言葉を言う。

「……もしもし？」

時刻は、たしか6時30分を過ぎていた。

俺

「もしもし？」

俺がそう言つて、向こうから返事が来るのにその時間はかからなかった。

もしもし、と言つ俺に、向こうは冷静な口調で「はい？」とだけ返してくる。

俺は意を決して、確認を取ろうとする。

「あの……城崎さんですか？」

「いえ、違います」

と返されたら迷わず電話を切ろうと思つたが、相手の返答は俺の望まないものだった。

「はい、そうですが」

ドキリ、と俺の体が微かに動くのがわかった。

さらに確認のため、自分の名前を言って様子を見る。

「……城崎……陵さん……ですか？」

俺は神にも頼むような気持ちだった。

どうか、『城崎』違いであるように、と。

もし、『陵』という名前だといわれても、『りょう』違いであるように、と。

偶然、同姓同名であるように、と。

しかし、俺の望みを意図も簡単に裏切るのが神と言うものだ。

「はい、私が城崎 陵ですが……って、こんな堅苦しくちやお前も話にくいよなア。なア？ 17歳の城崎 陵」

俺は思わず、「えっ」と声に出してしまった。

それからは言葉が喉に詰まってしまって、パクパクと口が動くだけで何も言えなかった。

「まアまア、言葉が詰まるのはわかる。一旦落ち着け。今の状況を理解しろ。いいか？ 今、お前が話しているのは紛れもなく、未来のお前だ。そこを理解してくれ」

俺は、必死にありえないことを理解しようと努める。

しかし、少し焦っていたのに変わりはない。

「はい……」とだけ答えた。

未来の俺が、チツと舌を鳴らしたのがハッキリ聞こえた。

俺は、ムツとしてしまった。

「オイオイ……俺らしくねーなア……俺って昔からそんな丁寧で堅いやつだったっけ？」

何かと、未来の俺の言葉には棘がある。

いや……今の俺も対して変わりねーか。

にしても、この話し方はまるで兄貴のような……。

まア、今ので少し冷静になれた。

「じゃあ……未来の俺に聞くけど、アンタは何年後の俺なんだ？
アンタも昔、俺と同じ体験をしたのか？」

未来の俺と俺の間に、しばし沈黙が続いた。

「……まず、前の質問に答えよう。俺は、お前の時代から12年後のお前さ」

「12年後……」

そう遠くない未来だった事に、少し驚いた。

「後の質問の答だ。その通り。お前の言う通り俺は12年前に同じ体験をしている。だが、この未来電話という都市伝説が、なんで他の誰でもなく、俺に降りかかったのかは、まったく判らない……。だが、俺たちに判る事は唯一つ。この事を、他言してはならない。未来のモノは、過去のモノに未来を教えるな。未来は一つ。つまりは、『未来を変えるな』という事だ」

「『未来を変えるな』……」

「ただし、俺は昔お前の歳の時、未来の俺にヒントはもらった。つまり、『未来を変えるな』という約束だが、これは何故か未来に起こる事について過去のモノにヒントを与える事ができる。ということとは、これは神が与えたゲームだと思ふことが妥当だ」

「神が与えたゲーム？」

「ああ、そうだ。こんなこと、普通ありえない事なんだ。もしかしたら、俺以外にもこの都市伝説の『被害者』がいるのかもしれないけどな」

「『被害者』って……何か危険な事でも起こるのか!？」

「いや、『被害者』つつーのは、やっぱりおかしいな」

どっちなんだよ。と思うが、未来の俺も今俺が思っている事を知っているのだろーと思ひ、なんだか不思議な気分になる。

「簡単に言つとだな、危険を間逃れるための『未来電話』だ。お前の未来を知っている俺が、俺の過去を思い出し、お前にヒントを与えりゃいい。いわば、未来電話つつーのは本来、事故や事件に、あ

るいは死ぬ運命にあるヤツを、助けるためのものなのさ。わかったか？」

俺は、しばらく時間を掛けて頭の中を整理した。

まず、俺はこの都市伝説に巻き込まれた一人であり、今俺とこの受話器を通して話しているのは12年後の俺で、その未来の俺が俺に言うヒントを基に、俺は危機を脱する。

そして今起こっている事は全て、紛れもない事実という事だ。

一旦思考を止め、俺はため息をついた。

こんなところか……。

「ああ……とりあえずは理解した」

「よし。じゃあこつからは、これからお前に降りかかる『危険』に関するヒントを言うぞ。12年も前の事だから曖昧だけどな、たぶん大した事なかったような気がするから安心しろよ」

ホントに大丈夫なのか俺の未来。

……まあ、ヒントを与えてくれるのが他ではない、俺に変わりはないのだから、心のどこかでは安心しているのだが。

「まア、なんだ。とにかく周囲に気を配れ！ プツッ！ ツー……
ツー……ツー……」

俺は絶望した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0639h/>

未来電話

2010年11月9日05時32分発行